

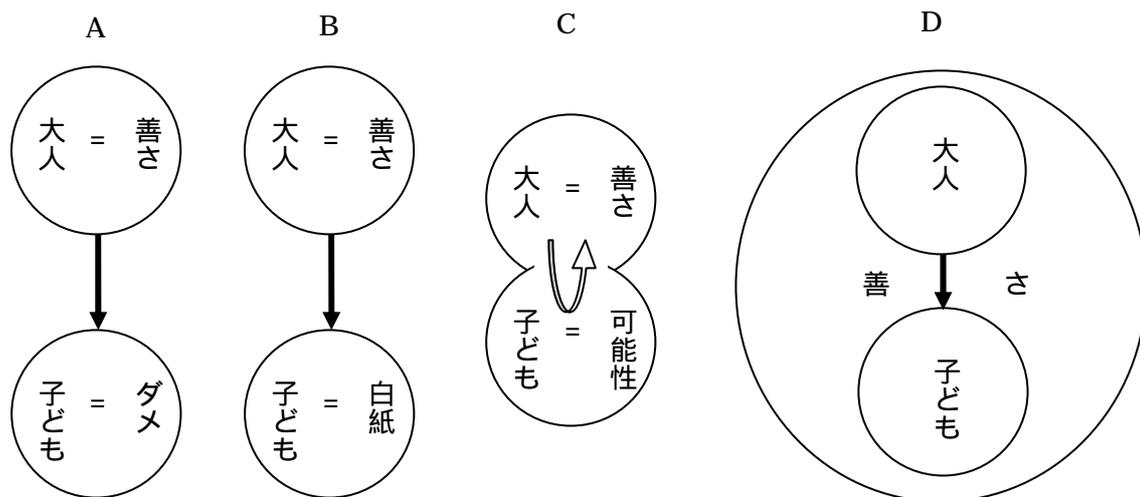
村井実の兼愛説：『新・教育学のすすめ』のすすめ

鈴木克明

村井実先生は日本の教育哲学会を代表する研究者であり、鈴木が師匠として尊敬する沼野一男先生がほぼ同じ歳なのに師匠として崇める先生、つまり、師匠の師匠にあたる。もちろん、畑違いの鈴木のことを村井実先生がご存知である訳もなく、単に片思いの関係である。一度、沼野先生のご自宅で、ちょっとした間だけ同席したのが「物理的」な唯一の接触であるが、いくつか著作は読ませていただいた。

かつて鈴木が仙台の夜間看護学校で、「教育学」を教えていたとき、テキストに使わせてもらっていたのが『新・教育学のすすめ』（村井実著、小学館創造選書、1978年初版、1325円）である。この本を1章ずつみんなと読み進め、鈴木は鈴木なりに「教育とは何か」について考えた。そして、妙に「すっきりした」ことを覚えている。「あ、そうか。そう考えればいいんだ」という納得感。「なるほど」と思った「風邪ひかせのヤブ医者」のおとぎ話が、これまた鈴木が尊敬する認知科学者・佐伯胖先生（青山学院大学教授、岩波新書『コンピュータと教育』黄332の著者）の書かれた『学びの構造』（東洋館出版社刊）からのヒントを得たものであったこと。子どもの「善くなるう」という原動力（「善さキン」と命名）を前提にして、教育のパラドックスを背負う潔さを支える「兼愛説」という考え方。今回、「基盤的教育論」を担当することになって、再びこの出会いを思い起こし、まとめる機会を得たことを、とても喜んでいるのです。

さて、前置きはこのぐらいにしましょう。「善くなるうとしている生物」として、わが子が「善く」育つことを願わない親はいない。若者が「善く」育つことを願わない大人はいない。しかし、われわれは、どう生きることが「善く生きる」ことかの答えを持っていない。この教育のパラドックスを「すっきり」表現したのが、下図である（『新・教育学のすすめ』、p.105の第一図）。さて、あなたはAからDのどの考え方を支持しますか？

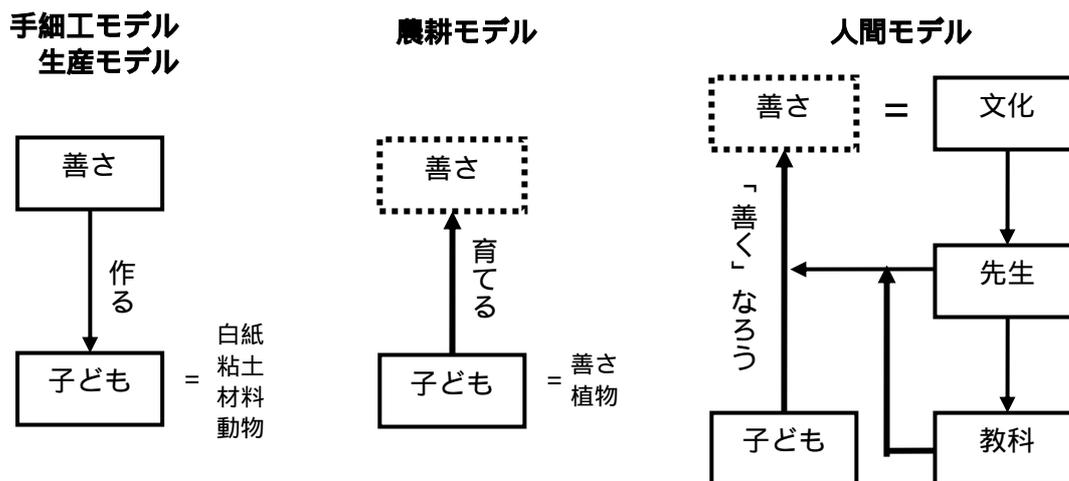


- ・ A この子どもたちを善くしたい---なぜなら、この子どもたちは、私たちが善くしてやらないかぎり、そのままではもともとダメなほうに動くものだから。
- ・ B この子どもたちを善くしたい---なぜなら、この子どもたちは、私たちが善くしてやらないかぎり、白紙のようなもので、善いもダメもわかるわけがないものだから。
- ・ C この子どもたちを善くしたい---なぜなら、この子どもたちは、もともと善くなる可能性をもっているものだから。
- ・ D この子どもたちを善くしたい---なぜなら、この子ども自身が、とにかく善くなるうとしているものだから。

子どもはもともとダメなもので、大人が子どもを導いていかねばならないと考えるのは「性悪説」と呼ばれる考え方。善いも悪いも分からないのが子どもと考えるのが「性白紙説」で、両方とも「どんどん教えようとする」ときの裏づけとなる。一方で、子どもたちの可能性を前提に働きかけるのは「性善説」で、『教える』の側面より『育てる』の側面を重視する。村井によれば、この3つ（A から C）の考え方はすべて、大人が「善い」とはどのようなものを把握しているという前提に立っているという共通点があり、「何が善くて何がダメか」は大人が決めている。「子どもの可能性を引き出す」といっても大人が「善い」と思うものだけを引き出すことになる、と指摘する。

村井の考え方はDの「善さ」が大人の側にない、という見方であり、これが「子どもたちを善くしたい。でも何が善くて何が悪いのか誰も自信を持って答えることができない。しかし子どもに働きかけないわけにはいかない」という教育のパラドックスを表現している。村井はDのモデルを「これをどう呼ぶか、うまい呼び方がありませんが、『善さ』を求めている子どもたち、たぶん焦ったりもがいたりしている子どもたちに、同じ経験をもった大人が同情して援助するという意味で、一応、性同説あるいは兼愛説とも呼んでおきましょう（p.104）」と命名した。

どう、すっきりしましたか？ まだ？ じゃあ、これはどうだ！（同書、p.155の第4図）



教育の「教える」側面を重視するのが「手細工モデル」。のちに大掛かりになって「生産モデル」という名前がふさわしい（工場型の）学校ができる。逆に、「育てる」側面を重視するのが「農耕モデル」。環境を整えてやることで、やがて芽が出て、もともと備わっていた「善さ」が育つと考える。村井の主張は「人間モデル」。もともと善さが備わっているわけでもなく、逆に大人が善さを子どもの中に作り込んでいけるわけでもなく、ただひたすら「善くなろう」としてもがき苦しみ、時に方向性を失いそうになっている子どもの成長の手助けとして、これまで大人が同じ思いで培ってきた「文化」を「教科」の形にして、「先生」が示していく。それをガイドとして、子どもの「善くなろう」という動きが活発化する。まさに「教える」と「育てる」を「善くしよう」、「善くなろう」という気持ちでつなげた人間らしいモデル、とは思いませんか？ 『新・教育学のすすめ』是非ご一読をお勧めします。実践者向けに分かりやすく書かれた教育雑誌の連載をまとめた初版が1978年。21刷を重ねて、いまだに販売しているところに、この本のものすごさが現れている。「ゆとり」の本当の意味が分かる本。